

女性のアイデンティティの確立と社会力の構築 —人生の樹をどう育てるか—

春日 美奈子（子ども心理学科・教授）・大野 和男（児童学科・准教授）

I. 研究の目的

1986年（昭和61年）4月1日に施行された男女雇用機会均等法によって女性の社会進出が促進され、その後、幾たびかの法制度の整備により女性の就業・環境は整備されてきた。安部政権は、アベノミクスの成長戦略で「女性の活躍・推進」を今後の成長の柱と位置づけていることから、女性が社会で活躍する道は確実に広がり、人生の選択肢は一昔前に比べて格段に広がりを見せている。生き方の選択肢の増加に対して、個人の主体性がともない各人の行動規範の質が問われるようになった。社会進出にともない女性の意識もそれにしっかりと対応できる能力が必要になる。自由社会において、各人の中に体系的・内在的に確立された行動規範がある。自分がとった行動についての結果は、本人自らその責任を負わなければならない。与えられた権利には、必ず責任が付くことを忘れてはならない。女性は一人の人間として立つと共にやがて親になる可能性を持つ。それゆえに子どもにとって親の存在は大きい。母親の愛情と養育は、子どもの基本的な安心感や社会性の土台となる力を養う上で決定的な役割を果たす。それゆえに女性の人間としての成熟が必要になる。

そこで、日本において隔世の感のある中で、女性が自立して仕事をもつことが大変だった時代、女性たちがいかに時代を切り開き自分の道を歩んでいったのか、大変な歴史の中を生き抜き時代を駆け抜け、誰にも恥じない自分であることを貫徹し自分の足跡を残した先達の軌跡を追うことによって、現代女性のアイデンティティの確立と社会力における女性の知的自立と知的雇用能力の獲得を検討する。そのことによって、現代女性の生き方について、示唆を与える切っ掛けとしたい。

II. 女性の生涯発達とアイデンティティ

1. 「人生の樹をどう育てるか」

人の成長は、木の成長とも似ている。一本の樹が多く年輪を刻むには、大地にしっかりと根を張りいかなる状況においても揺らぐことなく自分の道を貫く一本の筋の通った精神が必要であり、それは人格に繋がるものである。人格と言うものは、形でなぞらえてみれば、一本の樹木のようなもの。完成した大人の人格とは、樹木に例えれば、枝が均等に伸び、葉が豊かに茂り、綺麗に伸びた一本の木をさす。女性の生涯発達においてもどのように自分の根幹をしっかりと据え樹を育てていくのかが重要になる。

自由社会といわれる現代にほど遠い時代の中で、自由社会としてあるべき人間の行動を選んだ女性たち。その先達たちの軌跡には、逆境を乗り越え、自分の行動規範を根底に自分で臆せず道を切り開き自分らしく生きた数々の足跡が残されている。

本研究では、明治・大正・昭和・平成の時代を色濃く生き抜き104歳で亡くなられた我が国における女性解放の先駆者・加藤シヅエ、そして大正から昭和にかけて活躍した歌人

の柳原白蓮、極貧の農家に生まれ、辛苦を重ねつつも逆境を耐え抜き、息子清作を見事学問で立たせ、大正時代の細菌学者野口英世に育てた母、野口シカ、孤児救済のために奔走し「エリザベス・サンダース・ホーム」を設立した澤田美喜、1989年に紫綬褒章を受章、2014年には「世界最高齢の現役プロデューサー」として、また2015年には「最多舞台演出本数」でギネス記録に認定され90歳の今でも現役のプロデューサーとして次の作品に向けて全力で走り続けている石井ふく子、ポーランドにおける日本文化の普及に貢献した現役の茶道家山口宗悦、大学の教員から大学の学園主となり多くの困難を乗り越え女子教育の学びの道を作り今なお現役で教育に力を注ぐ松本紀子といった先達7名の人生の軌跡を追いながらそれぞれの人生の樹の構築過程と分岐点の分析を試みた。戦前の家制度における権威構造は、男性主導の一心同体規範を生み出し、女性にとっては生きづらい時代でもあった。その時代の真っ只中で、加藤も白蓮も澤田も時代の波に飲み込まれず果敢に生き抜き、その姿は今なお生き続け、後世に人生観として指針を与え続け、その足跡を追うかのように石井、山口、松本が今なお現役として新しき道を切り開き続けている。

2. 先達女性の生涯における発達過程と分岐点

人生において誰もが幾度か舵取りをしなければならない分岐点となる出来事に出会う。幾つかの出来事の中でも一際その人物のアイデンティティを形成する上で大きな影響を及ぼす大きく舵取りをしなければならない大きな分岐点がある。人はそれを根底にしながら少しずつ年輪を育み、一人の長い人生となり、その人の歴史を刻む。先達もまた、歴史と文化の空間軸の中で、それぞれのアイデンティティを形成しながら自分を貫き自分の道としての足跡を残している。

(1) 加藤シヅエ (1897-2001) の人生の樹の構築と分岐点

明治・大正・昭和の時代を生き抜き更に平成の時代をも歩み104歳という足跡を残した我が国における女性解放の先駆者である。10の分岐点を想定し、加藤シヅエの人生を検討した。人にはそれぞれの人生において、もっとも大きな意味を持つ人生の転機というべき時期がある。加藤は23歳の時に、産児制限運動のマーガレット・サンガー婦人に出会ったことで、一生の仕事とすべき道を見つけ、日本女性の地位の向上に尽力し、全生涯を貫いて走り続けた。産めよ殖やせよの軍国主義の時代に産児制限運動は国策と相反するものであったが、それを突き進めたのは、女性の地位の向上と母子の健康を守るという加藤の使命感が大きな原動力になっている(加藤,1996)。

加藤は初の女性国会議員として封建的家族制度の改革を始め、人工中絶の合法化、売春防止法の制定など、女性の法的権利の確立のために尽力した。加藤は、愛も仕事も、子育ても大切にしながら歩みを進めてきた女性でもある。それは決して平坦な道のりではなかったと思われるが、壁を乗り越えるために常に揺るぎない加藤独自の一貫して通す筋金根底にあるように思われる。それは、自立と努力・目的をもって生きること、そして人への深い愛情である。その人生は、自己との闘いと努力の積み重ねの結果であり、困難を乗り越えるごとに心の強さと柔軟さを育てている。そして歳を重ねても常に使命感を忘れずに老熟期の階段を静かに上りつめ最後まで社会への提言を発し続けた。“ひとりの女の生きる姿勢”は、明治・大正・昭和そして平成を色濃く生き抜き生涯現役の精神は豊かな年輪

となり大きな樹として、その思想や精神は没後も後世へと受け継がれている。

(2) 柳原白蓮(1885-1967)の人生の樹の構築と分岐点

柳原白蓮は、大正から昭和にかけて活躍した歌人であり、大正美人の一人として数えられていた。7つの分岐点を想定し、白蓮の人生を検討した。白蓮の人生において大きな転機は、大正10年、白蓮36歳の時におこった「白蓮事件」である。禁断の恋は、社会に大きな反響を巻き起こし、これを境に人々の視線にさらされ続ける試練の日々が始まっている。現代のような自由社会ではなく様々な制約があった時代において、この行動は姦通罪という刑法や華族令という法に縛られ、それと闘っていかなければならないことから相当の覚悟が必要になる。しかし、過酷な試練から逃避することなく果敢に受けとめその現実の中で自らの行動規範を重視しながら、心の内を歌に綴り世の中に発し続けた。

幾たびの試練が、白蓮の感性を深くし、芯の強い女性へと歩みを進めることに繋がっている。試練をばねにして一人の自立した女性としての生き方を貫き通し足跡を残したのである。

(3) 野口シカ(野口英世の母1853-1918)の人生の樹の構築と分岐点

野口シカは、大正時代の細菌学者野口英世の母である。1853年(嘉永6年)福島県翁島村三城瀧の極貧の農家に生まれ、祖父、両親が相次いで家を出てしまったため、信心深い祖母の手一つで育てられた。その祖母はシカが10歳の時に亡くなり一人ぼっちで生きなければならなくなった。シカは貧しい生活の中にあっても生前祖母が行っていた「観音信仰」と「苦しいことも耐え忍べば、必ず新しい道が開ける」というこの二つのことだけを何時も心に刻みつけて生きてきた。66歳という短い生涯には、多くの波となる分岐点があるが、みな苦労の連続ばかりであった。シカにとっての分岐点は、極貧と両親の家出による生育史環境からすでに幼少期から始まっている。わずか7歳の肩に家の生活がかかっていた。

出生から辛苦という二文字を背負いながら生きざる負えない宿命を抱え、両親の愛情も受けられないまま辛苦を重ねつつも逆境を耐え抜き、労働体験から得た一つひとつの苦労を自己の血肉として育み、気丈な意思の強い女性として成長してきた。その根底には、見えない大きな存在への畏敬の念と感謝の気持ちを、どんな時にも忘れることなく持ち続け、その守りの中で、鉄の如き意志と無限の慈愛を持ち、超えられない峠も乗り越え、二人の子どもの母親として愛児の奮起を支え続けてきた。信仰は生きるうえで大きな源でもあり、シカという樹を支えるぶれない一本の金筋でもあった。

自分の夢など持てない中で、忍耐と責任感はこの頃育まれている。数々の分岐点があるなかで、シカにとって生涯をかける分岐点となったのが、息子清作(後の英世)の左手の大やけどである。この日を境にハンディを持つ息子を学問で立たせるための使命感が青年期以降からその後の全生涯を貫いて走り抜けている。英世は夢であり、希望でもあった。その英世の人生に自分の人生を重ね合わせながら一心同体で歩んできた生涯である。シカを通して日本女性の底力と母性の使命の尊厳を知ることが、これからの女子教育に多くの指針を与えるものである。

(4) 澤田美喜(1901-1980)の人生の樹の構築と分岐点

明治34年9月19日に、三菱財閥の3代目当主・岩崎久弥の長女として誕生した。5つの分岐点を想定し、澤田美喜の人生を検討した。幼少期から当時の横網梅ヶ谷に例えられたくらい力と健康を兼ね備えたバイタリティの持ち主であった。澤田の人生の中で、特に重要な意味があったのは幼少期の海外への憧れとキリスト教に出会ったこと、そして、昭和20年澤田35歳の時に混血児と決定的な出会いをしたことが、後のエリザベス・サンダース・ホームの設立に繋がっている。混血児の保護を始めると、日本人からは、財閥娘の道楽などと言われなき中傷をうけることもあった。澤田は、日本における混血児の現状を訴えるため、そして養子縁組の法律の改定を求めるために、アメリカ講演を11年に渡って行っている。澤田は、様々な苦難を乗り越え、混血児教育を成し遂げた。この偉業は、アメリカのブラックウェル賞や内閣総理大臣顕彰、勲二等瑞宝章という形で国内外にて高く評価されている。

(5) 石井ふく子(1926-至現在)の人生の樹の構築と分岐点

大正15年9月1日、東京下谷区数奇屋町生まれ。父は新派の名優・伊志井寛。母は小唄の家元・三升延。東京女子経済専門学校(現・東京文化学園)卒業後、新東宝に入り女優を志すも身体を壊し断念、日本電建宣伝部に勤務。会社がテレビドラマのスポンサーになったことからTBSとのつながりが生まれ『東芝日曜劇場』の制作にも囑託として関わり、昭和36年に退職後、正式にTBSに入社。昭和49年、TBSを退社、専属のプロデューサーとしてTBSと契約を結んだ後も、敏腕プロデューサーとして数々のヒット作を生み続けている。その間、昭和43年からは舞台の演出・企画も手がけ「最多舞台演出本数」でギネス記録に認定されている。90年という歳月には様々な波があり岐路があった。その中で、もっとも大きな人生の転機というべき時期がある。石井32歳の時である。このときの事を石井は、「人は誰でも人生を大きく変えてしまうような岐路に立つ瞬間がある。それもたいていは何の前触れもなく突然立たされるのである。しかし、どんな格好で訪れるのかが問題なのではない。そのときどう対処するかが問題なのだ。やりたいことが私の中でちゃんと形になっていたことが強みだった」と述べている(石井、1993)。大きな転機を見極めて逃さなかったという確信は、その後の人生の大きな支えとなり自信となった。そのことが石井という樹を根底から支える強い根となっている。

8つの分岐点を想定し、石井ふく子の人生を検討した。人にはそれぞれの人生において、もっとも大きな意味を持つ人生の転機というべき時期がある。石井にとっての転機は、今なお恩師と慕う諏訪博(元TBS会長)との32歳の時の出会いである。この出会いが、名プロデューサーとして確かな道をつかむ切っ掛けとなった。90歳まで歩む道程には、小さい岐路も大きな岐路も数多くあった。それを乗り越えてこられたのは、幼少期の家庭環境の中で自然と育くまざるをえなかった自立心である。70歳になるまでどんなささいなことでも娘に頼らないで生きることを守り続け、しつけには厳しかった明治生まれの気丈な母。お互いを思い、愛しあっても、一緒に過ごす時間が少なかったことから愛しているのに不器用な表現しかできない親子。すぐに求めても得られない母の愛を、幼い自分の心に封じ込め恋しい気持ちを抑えながら一人で立てるように努力してきた姿がある。石井という太い樹の根幹には、孤独と寂しさから抜け出すために幼少期から青年期にかけて早く一

人の人間として立てるように努力した足跡が見られる。

人に恵まれて育つようにと「天一天上」の日に命がけで生んでくれた母の深い愛が、90歳となった今も、多くの人に囲まれながら現役の名プロデューサーとして「焦らず、怒らず、あきらめず」の精神を大切にしながら走り続ける原動力となっている。石井ふく子90歳、絶えず先を見据えながら精力的に仕事に取り組むその姿は、若い世代に「学んで老いず」の精神を無言で伝え続けている。

(6) 山口宗悦（山口悦子1928～至現在）の人生の樹の構築と分岐点

山口は、現役の茶道家である。ポーランドにおける日本文化の普及に貢献したとして、平成27年度外務大臣表彰を受けている。ポーランドのクラクフ市から勲章「ホノリスグラティエ」を授けられてもいる。7歳から茶道を始め、47歳の時に日立の技術者としてポーランドに赴任した夫の縁で、ポーランドに茶道を広めていくことになった。現在80歳を超えているが、ポーランドには、40年に渡って年に2度ほど訪れ茶道を広めることに務めている。山口に影響を与えたのは、母親の続けていくことの大切さの教えである。その教え通り、茶道はもちろん、琴、三味線などその道を究めている。山口は、人の関わりを重視しているが、それは茶道の心でもある。茶道、そして人生の中で重要な言葉として、「余情残心」を挙げている。お茶は、総合的な芸術であり、一つ一つを覚え、そこに気持ちを込めることが重要であるとする。現状を受け入れ、肯定的に物事を捉える姿勢が80歳を超えた今でも定期的にポーランドに足を向ける原動力になっている。

(7) 松本紀子（1924～至現在）の人生の樹の構築と分岐点

大正13年2月11日、東京本郷の東京帝国大学教授 長井真琴と常子との間に四人目の女の子として誕生した。大正13年甲子、丁度甲子園が出来た年の紀元節に生まれ「紀子」と名づけられた。現在の建国記念の日である。もし男の子として生まれていたら、時代が時代であることから戦場の露と消えこうして存在していなかったかもしれないと当時を振り返る。21歳の時、疎開先の御殿場で終戦を迎える。戦争は、多くの人の人生に大きな影響を与えた。戦争の体験は、松本が自分の人生を歩むうえで揺るぐことがない逞しい精神を作り上げた。「人間が生きていくためには、根っこになる芯になるものを自分の中に確立しなければいけないんですね。そして、何が起ころうとも倒れないという自信を自分の中に獲得しないと生きていけません。これは大変難しい作業なんですけれども、私の場合は忌まわしい戦争というものによって、もちろん戦争は二度と起ころうとはいけないんですが、受動的にそういう芯とか根っこを植え付けられてしまったんです。」と過ぎし日々を懐かしむかのように語る姿があった。

松本の人生を辿り、5つの分岐点を想定した。大きな波は、結婚後に起きている。父母は共にお寺の生まれであったが、父親は寺を出てインド哲学を専攻し、東大の教授を勤めた学者で、松本もその父の姿を追うかのように学者の家に嫁ぎ、自らも教壇に立ちながら、生涯を女子教育のために心血を注ぎ学園の充実発展のために尽す夫を支えながら歩みを進めてきた。平成4年、松本68歳の時に、いく山川を共に手を携えて乗り越えてきた夫が逝去し、悲しみにくれるまもなく学父である夫が命をかけて作り上げてきたものを運命として受けとめ、68歳の時に学長に就任する。この時より74歳に理事長に就任するまでの

数年間は、学園維持のために模索し、トンネルの中に入ったような生活の中で、毎晩眠れない日々を過ごしている。この大きな波を乗り越えたのは、戦争で培われた一本の強い金筋でもある松本独自の精神である。松本が夫から引き継ぎ守り育ててきた大切な場所は、未来を育む人材育成の清き場所となりながら、今日もおやかな明るい学生の声が学園に心地よくこだましている。大正・昭和・平成と歩みを進め順風満帆ではなく山あり谷ありの人生を「ローバ（老婆）は一日にして成らず」と微笑む。松本紀子93歳、今も学園主として現役で精力的に仕事に取り組んでいる。その姿は、学生にとって生きた教科書でもある。（分担：春日美奈子）

Ⅲ. 対象女性7名の比較

1. 問題

アイデンティティ（自我同一性）とは、エリクソン,E.H. が提唱した精神分析的人格発達理論の概念であり、自分がどのような社会的現実にならされているかを理解した上で、自分が間違いなくその目標に向かって発達しつつあり、自分の存在が独自の者で持続的であることに自信を持ち、自尊感情に裏付けながら行動することのできる状態であり、主体性、独自性、過去からの連続性、主観的実存的意識や感覚の総体のことで、いわば「これこそが自分自身である」といった実感を示す言葉である。エリクソンによれば、自分の存在意義に関わる問いに対し、自分自身を形成していく青年期において、獲得されるべき心理社会的課題でもあるとされている。つまり、アイデンティティの形成には社会との関わりの中で自分がどうあるべきかという視点が重要である。

そこで、対象女性7名が生きてきた時代背景を振り返り、青年期から、成人期、中年期とそれぞれのアイデンティティの形成を比較していく。

2. 対象女性の青年期までの生涯：思考の核

岡本（1994）によれば、かつての女性は、その生涯の大部分を子育てに費やしてきた。明治生まれの女性（1905年生まれ）の平均的ライフサイクルは、23歳結婚、25.5歳第1子誕生、平均寿命63.5歳である。昭和初期（1927年生まれ）の平均的ライフサイクルは、結婚・出産年齢はほぼ変わらず、平均寿命が70.0歳である。Figure 1. に示したように、本研究における対象女性は、野口を除いて、6名はこの範囲に含まれる。

本研究における対象女性は、江戸時代末期・明治・大正・昭和・平成と7名の出生年には70年以上開きがあるが、野口は会津戦争（戊辰戦争）、他の6名は太平洋戦争を経験している。柳原・澤田は実子を戦争でなくし、松本は自宅全焼、石井は目の前で死など、実体験として戦争の恐怖を体験している（Table 1.）。しかも、この戦争体験の時期は、青年期である。自我同一性を獲得する時期に、戦争の体験は各人に大きな影響を与えたと思われる。それに加えて、青年期に、人生において思考の核となるものとの出会いがある。野口は観音信仰、柳原・澤田はキリスト教、加藤はジャンヌダルク、松本は音楽、山口は茶道、といった具合である。これらは、それぞれの女性のその後の人生に多大な影響を与えている。

3. 対象女性の成人期、中年期、そして、老年期：他者との関わりとコミットメント
 戦前の女性は、学校を卒業すると、家事手伝いか腰掛け程度の仕事をして結婚し、出産後は家事・育児に専念するというように、女性の一生は、画一的なものであった（岡本、

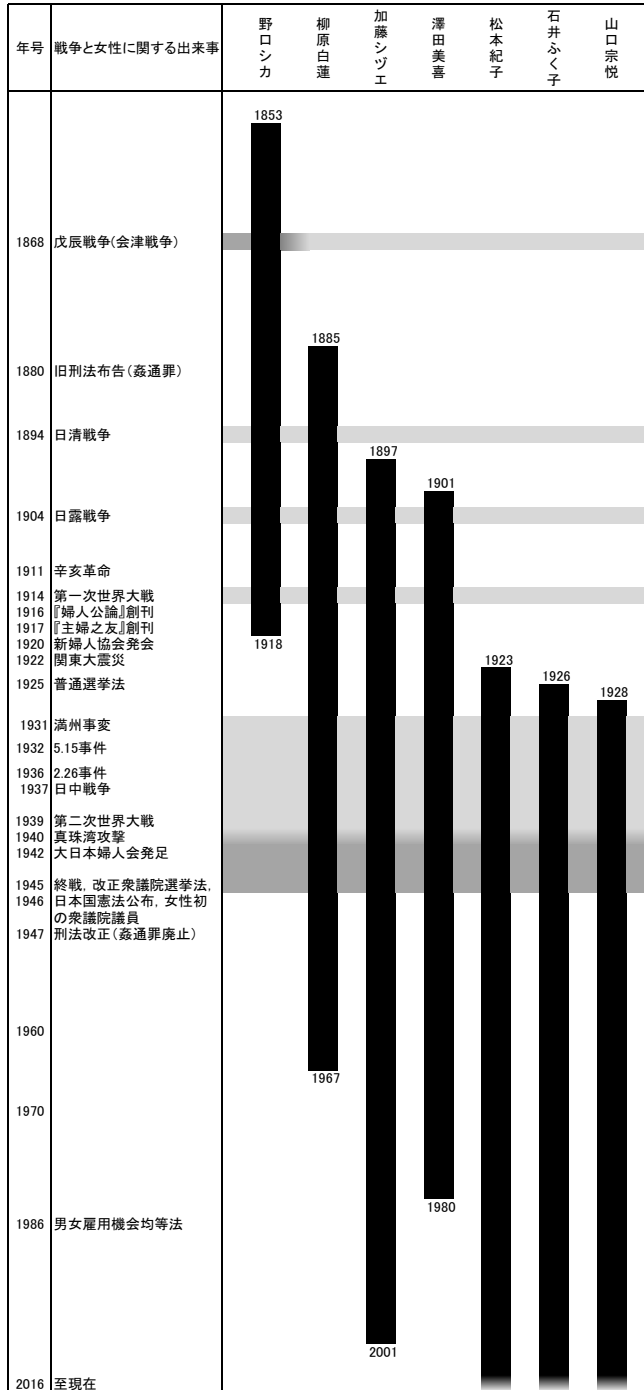


Figure 1. 本研究の対象と参考事項(女性に関する出来事と戦争)

* 戦争の時期を網掛けをした。対象者に直接かかわっていると思われる戦争は濃い網掛けで、それ以外は薄い網掛けで示した。

Table1. 対象女性が各年齢時に体験した主な出来事

	野口シカ	柳原白蓮	加藤シヅエ	澤田美喜	松本紀子	石井ふく子	山口宗悦
乳児期	0歳 極貧の農家	0歳 華族出身	0歳 裕福な実業家の家庭	0歳 三井財閥岩崎家の長女として誕生	0歳 学者の家庭に4女として誕生	0歳 新派の名優を父として誕生	0歳 一般家庭に出生病弱児
幼児期	8～15歳 農家に子守奉公へ	1～7歳 柳原家に里子に出される	12歳 ジャンヌダルクとの出会い		6歳 誠之小学校入学	3歳 日本舞踊を習い始める	7歳 お茶を始める
学童期	10歳 祖母みつ死去	15歳 北小路資武と結婚、出産	17歳 石本男爵と結婚		18歳 東京家政学院入学	18歳 東京女子経済専門学校附属高女在学中、山形で代用教員に	17歳 琴を始める
	12歳 観音信者に					19歳 都内に戻り長谷川一夫宅に居候	
	15～20歳 隣家に奉公に						
青年期	20歳 結婚	20～23歳 幽閉生活	20～21歳 2人の男児を出産	21歳 澤田健三と結婚	22歳 自宅が空襲により全焼疎開先にて終戦	22歳 新東宝のニューフェースとして女優に	
	22歳 長女・イヌ誕生	23歳 東洋英和女学院入学	23歳 婦人運動家マーガレット・サンガー夫人と出会い	キリスト教に改宗	25歳 結婚	24歳 日本電建入社	結婚
前成人期	24歳 長男・清生(後の英世)	25歳 伊藤伝右衛門と2度目の結婚		22歳 プエノスアイレスへ同行	27歳 長女誕生		
	26歳 清作、左手にやけど	26歳 「白蓮」という雅号を用い始める		長男・信一誕生	29歳 次女誕生		
成人期	29～40歳 荷物運搬に従事			23歳 次男・久雄誕生			
	35歳 次男・清三誕生	36歳 いわゆる「白蓮事件」		24歳 三男・晃誕生			
		37歳 2度目の幽閉生活		28歳 長女・恵美子誕生		32歳 TBS会長諏訪博との出会い	
		長男・香織を出産		30歳 ロンドンへ同行 孤児院ドクター・バーナードス・ホーム訪問		結婚(後に離婚)	
		38歳 宮崎龍介と再会		32歳 バリへ同行		35歳 日本電建退社、TBS入社	
		長女・莚琴誕生		34歳 ニューヨークへ同行			
				ジョセフィン・ペーカーと友人に			
				34歳 パール・S・バックと友人に		48歳 TBS退社	47歳 夫の転勤に伴いポーランドへ
	48歳 息子英世、渡米		47歳 石本男爵と離婚、加藤勲十と再婚	45歳 列車内で死亡した混血児の母親と間違われる		63歳 紫綬褒章受賞	
			48歳 娘・多喜子誕生	46歳 孤児院エリザベス・サンダースホーム設立		88歳 「世界最高齢の現役プロデューサー」ギネス記録に認定	
			49歳 女性初の衆議院議員当選			89歳 「最多舞台演出本数」ギネス記録に認定	
	50歳 産婆資格獲得			51歳 学校法人聖ステパノ学園創立			
	66歳 スペイン風邪による肺炎により死去	60歳 長男・香織が戦死		60歳 ブラジルに聖ステパノ農場設立	68歳 夫死去、学長就任	90歳 現役のプロデューサーとして活躍	
老年期		61歳 「国際悲母の会」「世界連邦婦人部」結成					
		76歳 緑内障により失明	77歳 政界引退	78歳 スペインマヨルカ島にて心臓発作により死去	74歳 理事長就任		77歳 夫死去
		81歳 死去	81歳 加藤勲十死去		81歳 学園主就任		87歳 外務大臣表彰
			91歳 国連人口賞受賞		91歳 尊厳死宣言		ポーランドクラクフ市から勲章「ホノリスグラティエ」授与
			104歳 死去				

*各人の出来事は、10歳単位で揃えた。

1994)。それに対して、対象女性は、家事・育児だけではなく、それぞれコミットメントをしていることが存在する (Table2.)。無償の愛 (野口)、短歌 (柳原)、女性の法的権利の確立 (加藤)、社会福祉 (澤田)、教育 (松本)、プロデュース (石井)、茶道 (山口) といった具合である。

また、対象者は、他者との出会いがそのアイデンティティの形成に重要な意味を持っていると思われる。Josselson (1973) は、親密な関係を持つことで女性のアイデンティティはより確かなものとなることを指摘している。客観的に見れば耐え難いような経験を積み重ねているものの、その人生のとらえ方は、かなり肯定的であることが対象者の言葉から見て取れる (Table2.)。ライフサイクル論における老年期は、これまで歩んできた人生の振り返りの時期でもあり、人生を自らの納得に基づいて歩んでこれたかどうかを見つめ直す時期でもある。人生を見返した上で、自分の人生を受け入れているかどうか、老年期の心理社会的危機である統合性の問題である。その意味では、対象者の肯定的な言葉の数々は、人生の集大成期である言葉としては理想に近いものではないだろうか。対象女性の生涯も、平均寿命よりただ長く生きるだけでなく、その長い人生の中年期・老年期そのものに重要な意味を持つ生き方をされていると考えられる。(分担：大野和男)

Table 2. 対象女性の概要

	野口シカ	柳原白蓮	加藤シヅエ	澤田美喜	松本紀子	石井ふく子	山口宗悦
出生	貧困	華族出身だが複雑な家庭	裕福な実業家	財閥家系	学者の家庭	実祖母の養子	一般家庭
思考の核	観音信仰	キリスト教	ジャンヌダルクの精神	キリスト教	音楽	家族	茶道の精神
最大の分岐点	息子清作の火傷(26歳)	白蓮事件(36歳)	女性初の衆議院議員(49歳)	エリザベス・サンダースホーム設立(46歳)	学長就任(69歳)	TBS専属プロデューサー	夫の転勤に伴うポーランド来訪
人との出会い	野口英世	宮崎龍介	マーガレットサンガー	ジョセフィン・ベーカー	大江先生	諏訪博	永井先生
コミットメント	無償の愛	短歌	女性の法的権利の確立	社会福祉	教育	プロデュース	茶道
ことば	苦しいことも堪え忍べば、必ず新しい道が開ける(伝記より)	そこひなき闇にかがやく星のごとわれの命をわがうちに見つ(辞世の句)	人生は社会的な意義を持った大きな目標に向かって生きるべきで、その目標に向かってともに闘っていくこと 1日10回感動すること。それが長生きの秘訣です。 1日10回は感謝するの。感謝は感動、健康、幸せの源なのよ。 ボケずに長生きする方法は4つ。1日3回の牛乳を飲むこと、1日10分は清掃すること、人と話すこと、1日10回は感動すること。ただ長く生きてりゃいいってものじゃないのね。(著書より)	人生は自分の手で、どんな色にも塗り替えられる(著書より)	人間が生きていくためには、根っこになる芯になるものを自分の中に確立しなければいけないですね。そして、何が起ころって倒れないと、言う自信を自分の中に獲得しないと生きていられないんです。	人は誰でも人生を大きく変えてしまうような岐路に立つ瞬間がある。それかもしれない何の前触れもなく突然立たされるのである。しかし、どんな格好で訪れるのが問題なのではない。そのときどう対処するかが問題なのだ。足りたことが私の中でちゃんと形になっていたことが強みだった。(面接より)	余剰残心(面接より)
					ローベ(老婆)は1日にして成らず(面接より)	焦らず、怒らず、あきらめず(著書より)	

IV. 温故知新 ～個人のライフサイクルと精神的発達～

人間の一生は時間と空間の制約を免れることはできない。歴史という時間軸と文化という空間軸のなかに無限の人々の人生が存在している。人生とは、道徳的・精神的な旅であり、その旅には、確かな肉となる羅針盤が必要であることは否めない。自分なりの人生観や倫理観といったものが、いわば生きる基軸となり、迷った時に立ち返るべき原点として機能する。時代という大きな波の中で、全身全霊をかけて生きることに真摯に取り組んできた先達7人の軌跡を辿る中で、大きな波となる共通の転換期的体験として「戦争」が彼女たちそれぞれの精神的発達に大きな影響を及ぼしていることが分かった。この戦争での体験で培った精神や価値観がそれぞれの人格形成に繋がっている。ここで培われた精神が年齢と共に育まれ基軸となり、青年・成人期と人生を歩む中で迎える逆境をひるむことなく果敢に挑戦して乗り越える原動力となっている。そこには、日本の女性を持つ本質としての強さ、日本の女性の底力がある。

男性社会の厚き重い門戸を開いた女性たち、そこには一人ひとりの層の厚さがある。隔世の感のある中で、時代に翻弄されながらも妥協することなく自らの道を切り開き多くの足跡を残し、爽やかな清風のようにその人生を駆け抜けた先達がいた。そこには、孤独や不安、葛藤といった様々な感情の渦に涙を流しながらも自分の足でしっかりと立ち上がり、歩みを続けてきた軌跡がある。自分を貫いて生きる姿には、誰も踏み入らない道を突き進んだ自負が漂う。江戸時代末期・明治・大正・昭和・平成といった時代を生き抜いてきた素晴らしい先達たち、そこに根づく大切なことは、生き方を錆びさせないようにしながら各自の大樹の根幹を強めることに努めていることである。

人の人生は、年輪にも似ている。多く刻まれた輪は、樹によって違うように、人の人生もまた喜びと悲しみの分だけ違ってくる。自らの行動規範を持ちながら歩みを進めることは、いつの世においても常に勇気と努力そして強い精神力が必要になる。戦前の家制度における権威構造は、男性主導の一心同体規範を生み出した。本研究で対象とした7名も行動規範を女性が持つことが許されない時代の中で、時代の波に飲み込まれず果敢に人生を切り開く努力を続けた先達である。あらゆる因習の壁や困難を乗り越え遅く生き抜いたその姿は、今なお足跡として生き続け、多くの人に人生観として指針を与える要素を含んでいる。自由社会に生きる現代の女性たちは、行動規範のもつ深い意味を、先達の生きた歴史を振り返りながら考えていく必要がある。

時代の風波の中、出会いと別れの喜びと哀しみも知り、果敢に自分の人生を切り開いてきたその軌跡は、あとに続く者に、大きな勇気と生きる指針を与え続けている。その足跡を、あとに続く者たちは受け継いでいくことを忘れてはならない。時代の変遷とともに社会が希薄になり生きづらさを抱えながら夢を持たない若者が多くなってきた。生きづらさは、どの時代においても存在したものであり、時代のうねりの中で先達たちは、ある時は耐え抜きそしてある時は挑戦し自分の持てる力を懸命に振るいながら歩みを進め歴史をきちんと生き抜いてきた、その姿に豊かなヒントがある。どんな時でも希望を持ち、諦めることなく直向きに努力を重ねていくことを通して人格は磨かれていく。男性社会の厚く重い門戸を開いた先達たち、その存在が現代社会を生きる私たちに新たな自信を与えるものである。

女性の生涯発達は、非常に奥深いものがある。今回7人の先達の中で、研究対象である

石井ふく子氏と松本紀子氏は、90歳を越えて今も現役で精力的にそれぞれの仕事に取り組みながら歩みを進めておられる方々である。今回このお二人には、それぞれ同意を得て面接調査を進めさせていただいた。現役で今なお人生に挑戦されておられるその姿に学ぶことは多いことから、今後も女性の生涯発達の研究を進め、各自の大樹の根幹を強めるものが何であるのか問い続け、機会をみて報告としたい。

本研究は、時代の波に飲み込まれることなく自分を見失わず、先達のように、自分の道を貫き切り開いていこうと志す全ての女性たちへ捧げたい。 (分担：春日美奈子)

謝辞

最後に本研究に対し快くご協力を頂いた石井ふく子氏と松本紀子氏、山口宗悦氏に、心からお礼を申し上げます。

参考文献

- 石井ふく子 1993 『お陰さまで』世界文化社
井上洋子 2011 『原白蓮 (西の本人物誌20)』西日本新聞社
Josselson,R. 1973 Psychodynamic aspects of identity formation in collage women. *Journal of Youth and Adolescence*,2,3-52.
加藤シヅエ 1996 『百歳の幸福論：悔いなく今日を生きるための知恵』大和書房
加藤シヅエ・加藤タキ 1989 『「愛・仕事・子育て」すべてが生活』大和書房
木下英治 1995 『石井ふく子 おんなの学校』文藝春秋
宮崎路苺 (著)・山本晃一 (編集) 2014 『娘が語る白蓮』河出書房新社
宮崎路苺 (監修) 2014 『白蓮：気高く、純粋に。時代を翔けた愛の生涯』河出書房新社
野口英世記念会 (編) 1959 『野口博士とその母』(財)野口日英世記念会
岡本祐子 1994 「第一章 女性の発達とライフサイクル」岡本祐子・松下美智子 (編) 『女性のためのライフサイクル心理学』福村出版
岡本祐子 1997 『中年からのアイデンティティ発達の心理学：成人期・老年期の心の発達と共に生きることの意味』ナカニシヤ出版
田中章義 2014 『野口英世の母 シカ』白水社